

## 序にかえて

## 『ロシア旅行記』とリドウン

ロシアへ行く！ ルイス・キャロル自身が驚いているロシア行きは、『不思議の国のアリス』を出版して一年半程のちの一八六七年のことでした。その年フランスでは万国博覧会が開催されていたため、新しいもの珍しいものの好きなキャロルはパリへ見物に行くつもりで、「フランス語のレッスンに通って四回目になる」と日記に書いていますが、まだロシアへ行く話はない様子でした。出発の前日になりパスポートが届いたことと「今までに英国から出たことのない者が外国へ、それもロシアへ行くのだ！」と記して、わくわくした気持ちが日記のなかにのぞいています。

行き先がロシアというのは、旅行に声を掛けてくれた友人ヘンリー・パリィ・ドゥンの予定によるもので、キャロルはいわばお供の旅行でした。それにしても外国へ行くのに胸躍るものがあることは今も昔も変わりなく、『不思議の国のアリス』の作者が、習慣は異なりことばは通じない国で経験することをどのように書いていたのでしょうか。

出発の日は、ちょうどトルコの皇帝が初めて英国を訪れたときで、翌日のタイムズ紙は国民の熱烈な歓迎を紹介しています。気持の弾んだキャロルは、皇帝と自分とを同格に扱う口振りで旅行記を書き出し、その気分はドーバーに泊まった翌朝の食事の描写にも表れ、さらに旅行記全体の調子となり続いていくようです。リドゥンも日記を付けていましたが既に外国へ行く経験を重ねていたので大方は気に留めていないことでした。キャロルの方は些細な事も見逃さず筆を揮っているところから、この機会を並々ならず喜んでいた様子にみえます。

旅行記は日記の形式をとっていました。キャロルは二十一歳の頃に一冊目の日記を書き、亡くなる前には合わせて十三冊になりました。現在残っている九冊は、

一九六九年にドジスン・ファミリー・エステイトのフィリップ・ドジスン・ジェイクス氏から大英図書館に寄託されました。各冊はいずれも縦長(十八・三×十一・五センチ)の無地のノートで、オクスフォードの文具店 W・エムバリンのシールが残っています。

ロシア旅行記も日頃付けている日記と同じ形式の新しいノートで二冊に書かれています。こちらは現在アメリカのプリンストン大学図書館にあるモリス・パリッシュ・コレクションに入っています。つまり普段の日記は英国で、ロシア旅行の日記は米国の図書館で所蔵され、別々になっています。

キャロル自身が日記の表紙に書いた通し番号からはプリンストンにあるロシア旅行記の二冊は別にして、二冊の表紙には、I、II、とだけ書いてあります。本文中には一度だけ「筆者」ということばがあることから推測すると、日記の形をとりながら、普段の日記とは異なって家族や友人に読ませるつもりで書いていた様子です。事実、旅行から六年後にはエラ・モニア・ウィリアムズに貸していたことが手紙からわかっています。またその翌年にはソールズベリ卿セシルの娘グェンドレン・セシルのため

にロシア語の十から十の数詞を織り込んだ詩を作っているので、旅行記も貸して読ませているのだろうと思われず。

旅行に声を掛けてくれたヘンリー・パリール・リドゥン（一八二九—一八九〇）は、オクスフォードのクライスト・チャーチ学寮出身でキャロルの先輩でした。子どもの頃からタイムズ紙に穴を開けて被り、説教の真似事をして遊んでいたという逸話のあるリドゥンは、熱心な福音派の家庭で育ち、大学では十九世紀初めに起きたオクスフォード運動という教会改革運動の指導者キープルやピュージの後継者と目されてきました。学生時代から外国を旅行する機会に恵まれて、二十三歳の時にはローマへ旅をしました。彼の噂を耳にしていた法王の侍従ジョージ・タルボットは若いリドゥンをピオ九世に謁見させ、カトリックに改宗させようと思いました。見事な控えの間をいくつも通り、その奥にある質素な造りの書齋で法王に拝謁した日をリドゥンは「素晴らしい一日」と日記に書きました。二十四歳で国教会の執事となり、教区教会の手伝いをしますが、健康上の理由で一年しか続けられませんでした。教区で初めて説教をしたときから、「若いのに説教は大主教よりも巧い」と評判になりました。二十五

歳で司祭の叙階を受けると、オクスフォードに新しくできたカズデンの神学校（司祭試験の予備校）の副校長を五年務めました。その後セント・エドモンドホールの副校長を三年務め、一八六二年にクライスト・チャーチに戻ると、学寮に居室を得て説教に専念することにしました。リドゥンの話が人々を惹きつけた例は他にもありました。エドモンドホールの副校長時代には自室で始めたギリシャ語新約聖書講座に集まる人が部屋に入りきれなくなり、隣のクイーンズ・コレッジのホールに場所を移し、さらにはクライスト・チャーチの大ホールを使用するまでになり、十年間続いたということです。ロシアへ行く頃にはオクスフォード運動の賛同者としては最初の主教となっていたW・K・ハミルトンの頼みで、リドゥンはソールズベリ大聖堂の諮問司祭兼名誉参事会員になっていました。

旅行に出る前年の一八六六年、リドゥンが学生時代から指導を受けていたキープルが亡くなりました。リドゥン自身はこの年にオクスフォードで毎年八回のシリーズで夏に開かれるパンプトン・レクチャーの神学講義を担当しています。彼の講義、『我らが主であり救い主であるイエス・キリストの神性』は、出版されるとその年に十五

刷を重ね、ドイツ語にも翻訳されてヨーロッパやロシアの教会関係者の間にはリドゥンの名前の方が本人よりもひと足早く届いていました。ロシアへ出掛けるひと月前にはリドゥンはバンプトン・レクチャーの改訂をおこない、第二版を印刷に送る準備を進めていて、キャロルも一度は徹夜をして下調べの手伝いができたと喜んでいました。ロシアへの旅行は、リドゥンにとってソールズベリ主教ハミルトンとオクスフォードの主教ウィルバーフォースの勧めにより、紹介状を携えてロシア正教大主教のフィラレートと、非公式ながら教会の一致について話し合いをする目的があったようです。

キャロルのロシア行きには以上のような背景がありました。

旅行相手がリドゥンだったということは、見学先に美術館や庭園、宮殿、城と共に、教会、聖堂、修道院の多いことを物語っています。旅行中は祭や結婚式も見ていました。田舎に行くとき農家の家のなかを覗きました。馬車も使いましたが、またよく歩いています。このときの年齢はキャロルが三十五歳、リドゥンが三十八歳でした。景色を見晴らす高い所があれば上り、教会や大聖堂の一番高い所や、塔の天辺まで上がったことを十回記録しています。ある塔は高さ百メートル、ある塔の段は三八〇段と数

えていました。石造りの塔の狭い階段はぐるぐると回り目眩を感じるほどだったようです。快適なホテルもあれば、そうでないホテルもありました。しかし珍しいものに対する好奇心は、あらゆる不便さを凌いでいた様子です。

ふたりは紹介状を持って人を訪ねていきますが、行ってみると先方は休暇で田舎や国外へ出ていて会えないことも少なくありませんでした。そうしたなかで、帰途にペテルブルグで会ったプチャーチン伯爵には、二度にわたりエルミタージュ美術館と宮殿を案内してもらっています。キャロル自身は知らなかったことでしょうが、プチャーチン伯は日本と縁が深く、キャロルのロシア旅行からさかのぼる十三年前の一八五四年に二回日本を訪れて、翌五五年に日露和親条約を締結した人でした。ちょうどそのときには安政の大地震と大津波に遭い、乗ってきた軍艦が沈没し戸田ヘダの船大工の人々の協力で新しい船を建造してヘダ号と名付けた話は今に伝わります。二〇〇五年にはゆかりの地で百五十周年の記念祭と記念展が催されました。

リドゥンは旅行に温度計と湿度計を持っていきました。キャロルは旅行用にコマが倒れない工夫をしたチェス盤を持って行きました。旅行のガイドブックには一八六五

年版のジョン・マレーの『旅行者用案内書』を持っていきました。ロシア語の辞書、単語集、地図はペテルブルグで手に入れていきます。

旅行を終えてパリからドーバーへ戻るときには、ちょうどヨーロッパ各地で月食が見られ、闇から再び輝きを取り戻した月の下を二ヶ月ぶりに祖国へ向かう船で、キャロルは出発のときとは異なる旅の終わりの感慨に浸っています。旅行記では、おどけたり、むきになったり、嘆いたりする描写にくわえて細やかな叙景もみられます。

ロシア旅行はキャロルにとつて最初で最後の外国行きになりました。旅行の翌年にはイングランドの北部にあるクロフトで牧師をしていた父親が急逝したために、家族はそれまで住んでいた牧師館を引き払い他所へ移ることになり、キャロルは前の年とは打って変わる慌ただしい夏を過ごしました。リドゥンの方も翌年に、ソールズベリ司教ハミルトンが亡くなり、さらに海軍司令官だった父が他界しました。一八六七年のロシア行きは、思えばちょうどよい時期だったようです。バンプトン・レクチャーから一年後に出かけたので、彼の名前を知る人々からは快く迎えられました。ロシアで会談した大主教フィラレートはリドゥンが訪れた三ヶ月後に他界しています。

旅行の翌年にキーブルを記念して創設するコレッジの学寮長になるようにリドゥンは幾度も要請を受けますが固辞しています。一八七〇年にソールズベリ卿セシルが総長就任のためオクスフォードに滞在した折、キャロルはリドゥンの仲介で、学寮の自分の部屋にセシルとその子どもたちを招いて写真を撮っています。その後数年間、キャロルはセシルの館ハットフィールドハウスに招かれてクリスマスや年末年始に泊まりがけで訪れ、リドゥンとその妹のルイーザともよく一緒にいました。

セシルがオクスフォードの総長に就任した翌年にリドゥンはかねてより希望していたセント・ポール大聖堂の聖堂参事会員になりました。このロンドンの大聖堂の説教は、それまでは聖歌隊席のある内陣でこぢんまりとおこなわれていましたが、リドゥンが着任した後は、式典以外には使用したことがない広い本堂でおこなうようになり、大勢の人が話を聞くように集まりました。こうして国教会の中心である大聖堂を礼拝の場にふさわしく甦らせたいという念願をリドゥンは果たしました。

リドゥンがセント・ポールに着任した年に、キャロルは一番下の妹を連れて大聖堂を訪ねて行くことができました。リドゥンからは事前に、「自分は出かけているが、

もちろん来てくれ」という返事を貰い、キャロルはアーメン・コート三番地を訪れて、リドゥンの妹のルイーザ・アンブローズ夫人から気持のよいもてなしを受け、楽しいひとときを過ごしました。

ロシア旅行以来、ロシアとロシアの教会関係者に対して、リドゥンは理解と信頼を持ち続けていたようです。一八七七年にロシアとトルコが開戦し、英国政府はトルコに荷担して海軍を派遣しました。この時リドゥンはロシアに味方する発言を繰り返しておこない、保守党政権の有力者ソールズベリ卿セシルに宛てて、また貴族院に列なる司教たちへ宛てて幾度も手紙を送りました。手紙のなかには、リドゥンを国賊として投獄すべきだという記事がペルメル・ガゼット紙に載っている、とも書いていました。

旅行記のなかには英国の国教会にすっかり満足しているキャロルと、キリスト教の教会の和合、一致を目的としているリドゥンの姿もみられます。リドゥンは自分で正しいと確信すれば、批判を受けることは意に介さないところがあり、相容れない考えを持つと思う相手とは、議論を避けるようにしていました。一方キャロルは、こう

と思うと、とことん自分の考えることを相手に伝えようとする人でした。

異なる性格のふたりでしたが、どちらも気心を知る仲間内になると、ユーモラスなことを口にしていたようです。リドゥンの猫好きは学寮の仲間たちの知るところでした。「犬は喜ぶと尻尾を振り、怒ると唸るよ。だけど猫はその逆をするね。だから猫はおかしいのさ。」「不思議の国」の猫はそんなことを言います。学寮の談話室にはよく猫が入りして、リドゥンをみるとすぐに傍へ寄ってきました。リドゥンは猫の尻尾を、猫の気分計測器と呼んで、「キャットメーター」ということばを造っていました。

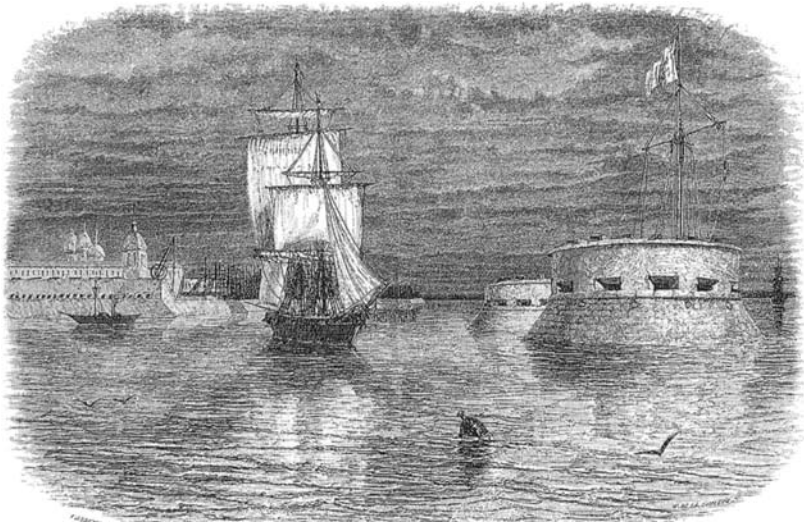
引退した学寮長リデルのところから、学寮の談話室に白い猫が送られてきたときに、キャロルは、「リドゥンがいたら、どんなに喜んだことかと思えます」と、礼状に書きました。一八九〇年九月九日、リドゥンは世を去り、望んでいたとおりにセント・ポール大聖堂に葬られ、記念に造られた墓碑の白い大理石像には横たわるリドゥンの姿があります。キャロルは一八九八年にきょうだいの住むギルフォードの家で亡くなりました。ハーコマーが描いたキャロルの肖像画は学寮の大ホールに今も掛かっています。

八月二十一日（水）〔ペテルブルグ〕

朝食後まもなくプチャーチン伯爵がリドゥンを訪ねてきた。われわれがエルミタージユの見学を予定していると聞くと、とても親切に案内を申し出て、絵画館ばかりか冬宮殿のなかを通り、英国の皇太子のためにあてられていたひと続きの部屋や、礼拝堂など、そのどれも一般の見学者には入れないところを見せてもらった。絵画館では前回見られなかったところ、特にロシア派の絵が興味深い。たいそうすばらしい絵が何枚かある。ブルーニによる「荒野で蛇を上げるモーゼ」という非常に大きな一枚があった。ざっと測ってみたところ、巾が二十七フィート（八メートル）、高さは十八フィート（五・四メートル）もある。構想の壮大なこと、イスラエル人の群集に表れた実に様々な表情、敬虔、恐れ、絶望の表情、さらに傷を負ったもの、死んでいくものなど、これはまさに叙事詩である。その絵のなかで強く印象に残っているのは、画面手前の中央で筋骨逞しい男が死の苦悶に身をよじらせて、その手足には一匹の蛇がきらりと光るとぐるを巻き、からみついている姿であった。

ところでロシア絵画のなかでも最も印象的なものは海の絵と言えるだろう。最近この美術館で購入して、まだ番号も付いていないものがあつた。それは嵐の場面で、難破船の帆柱に生存者が数人取りすがり画面の手前を漂っている。後ろには次々とうち寄せる波が山のように大きく、その波頭は怒り狂った風のために激しい水しぶきと なって碎け散る。一方、水平線近くの太陽の光は、高く上がった波を透かして薄緑色に映え、光は水を通り抜けてきているような錯覚を起こさせる。他所で同じような絵を見たことはあるが、これほど見事なできばえのものは初めてだ。

午後はイサーク教会のいちばん上までのぼつた。そこから見える町の景色はとてもよかつた。緑や赤の屋根がある白い家々が澄み切つた陽光を受けて林立し、すばらしい風景になつている。ネブスキーにあるドミニクの店で食事をし、それから上流階級の住宅地を馬車で走つた。美しい小さな別荘が並び、家のまわりは趣味のよいきれいな庭になつている。冬が来る頃には花はみんな屋内に入れなければならぬだろう。私たちの通つたところを見るからにロトゥン・ロウのような上流の人々のドライブ道になつていた。



クロンシュタット沖合の停泊地

(8月22日)

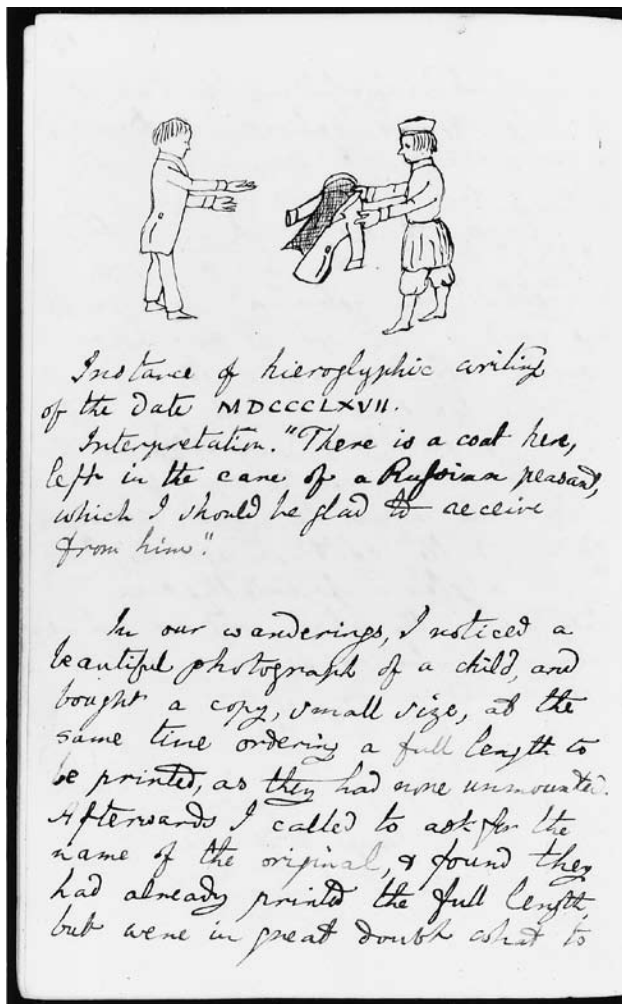
Roadstead near Cronstadt. (22 August.)

八月二十二日(木)〔ペテルブルグ：クロンシタット：ペテルブルグ〕

マクスウイニー氏の親切な招待を受けて、九時にクロンシタットへ出かけた。いろいろと興味深い一日であった。マクスウイニー氏は先ず造船所と造兵廠ぞうへいじやうのなかを案内してくれた。詳しく見る時間はなかったが、その工事が非常に大がかりな規模で進められているということや、戦争の時に使用できる物資の、おおよその規模を知ることができた。指揮官が内部を案内してくれた。

造兵廠で変わったものを見た。砲艦「ヴァルチャー」が搭載していた英国軍の大砲で、艦が漂着して戦利品になっていた。

「地球の磁場観測所」を見学した。その所長のヴィパヴェニエツ司令官に紹介を受けた。彼は英語のようなことばで自分の専門分野の理論と実践について説明してくれた。私にはまったく理解できない内容だから、たとえスラブ祖語で話されたとしても変わりはないだろう。別れ際に丁寧とそのテーマに関する自分の著作を贈呈された。残念ながらそれはロシア語で書かれていた。



1867年の象形文字の事例

解説 「ここにコートがある  
ロシアのお百姓にあずけておいた  
それを受けとれると私はうれしい」

キャロルの旅行記の一頁

(8月22日)

ボートを漕いで入り江を渡り、建設中の巨大な造船所を詳しく見学した。壁は厚く堅い花崗岩で、外側になる面も建物の内装に使ってじゅうぶんなくらい滑らかに磨いてある。ちょうどセメントを敷いたところへ一枚の花崗岩を据える作業の最中で、将校の指揮の下にたいして大声を立てることもなく進んでいた。全体は巨大な蟻の巣に似ていて、何百人もの作業員が大きな窪みのなかを隅から隅まで働いて、四方には絶えずハンマーの音が響いている。それを見るとピラミッドの建設のありさまもかくやと思われた。この造船所の建設費用は三百五十万ルーブル(四十二億円)くらいらしい。マクスイニー氏の教会の鐘楼に上った。周辺にはすばらしい景色が広がっている。マクスイニー家で食事をした。食事が終わると、マクスイニー氏は乗る船が先に出るためにわれわれよりひと足早く家を出た。リドゥンは到着いたときにここに外套を預けておいたので、帰り際にそれを出してもらおうことになった。お手伝いが話すのはロシア語だけで、私は辞書を置いてきてしまい、持ってきた小さな語彙集には「外套」という語が出ていないので、やっかいなことになった。リドゥンはまず着ている上着を指しているいろとジェスチャーをやってみた。上着を半分脱ぐ動作もやってみ

八月二十一日(水)〔ペテルブルグ〕

プチャーチン伯爵 エフイム・ワシリエビッチ・プチャーチン(一八〇三—一八八三)。ロシアの海軍提督。八月十三日にモスクワのデユサツクス・ホテルにプチャーチン夫人からリドウン宛ての手紙が届いた。プチャーチンは日本に関わりのあった人で興味深い。この年から十三年さかのぼる一八五四年には二度日本を訪れ日魯和親条約の締結をおこなった。同年十一月五日には下田の港で乗ってきた鑑船デアアナ号が安政の大津波で沈没した。日本に対して友好的な人物であった。

エルミタージュ 七月三十一日に見学したが、その時は絵画をじゅうぶんに観ることができないのを、キャロルは残念と思っていた。

英国皇太子の……部屋 一年前の十一月、英国の皇太子が妃の妹でデンマーク王女ダーグマーとロシアの皇太子アレクサンドルの結婚式のためにペテルブルグを訪れて、滞在した部屋。

ブルーニ フィデリオ・ブルーニ(二七九九—一八七五)。ミラノに生まれ、一八〇七

年に父親が家族を連れてロシアへ移住、ロシア人に帰化した。

「モーセは荒野でへびを上げた」 または「モーセは荒野で(青銅の)へびを上げた」とも言う。旧約聖書「民数記」二十一章四—九節「モーセは青銅で蛇を造り旗竿の先に掲げた。蛇が人を咬んでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと命を得た」をテーマにした絵画。エルミタージュ美術館から一八九八年に他の絵画八十点と共にロシア美術館に移され、二〇〇〇年に大掛りな修復がおこなわれた作品。

まだ番号もついでいない絵 キャロルの海の絵の描写からはおそらくイヴァン・アイヴァゾフスキーの「恐怖の波」という作品のことであろう、とエルミタージュ美術館からの回答である。一八九八年に国立ロシア美術館が開館したのを記念してエルミタージュ美術館から移された八十点の作品の一つで、現在はロシア美術館にある。アイヴァゾフスキーは海の画家、ヒューマニズムの画家と呼ばれ、波の恐怖と戦う人間の姿に社会の底辺で苦しむ人々を、太陽の光に救いの光を描いている、という。原題は「第九の波」で、ロシア語の第

九には、「立ち向かうことのできない、恐ろしいもの」を指す意味がある。

イサーク教会 七月二十八日も訪れた教会。

ネブスキー 七月二十八日を参照。

ロトウクロウ ロンドンの中心部にあるハイドパークの乗馬道。上流人士が馬であるいは馬車で通ることを日課とした。

八月二十二日（木）（ペテルブルグ：クロンシタット：ペテルブルグ）

マクスウイニー クロンシタットに在住の英国人牧師。リドゥンによれば、八月一

日にミユア家の食事に同席した。

クロンシタット 七月三十一日参照。

ヒエログリフ 古代エジプトの神官が使った象形文字、絵文字。ニネベでは、古代

アッシリア文字が使われた。

ニネベ 古代アッシリアの首都。ニネベの町は、旧約聖書の「ヨナ書」のなかに、

町の人々が放埒<sup>ほうちやう</sup>を極め、そのため神はヨナを預言者として送り、ヨナは町中

の人々を改心させるという話がある。紀元前六二二年にアッシリア帝国の滅亡で町は廃墟となった。

スケッチして キャロルは子どもの頃から線描の絵を描き自分で創作した読み物に添えていた。同じオクスフォード大学にいた美術評論家ジョン・ラスキンに自分の絵の評価を求めたことがあるが、本格的に習っても上達の見込みはないと言われた。『不思議の国のアリス』のもとになった手書きの本「地下の国のアリス」には、キャロルが自分で挿絵を描き入れている。絵を描くことについては、七月十三日、八月十五日を参照。

\* キャロルの日記はふつうノートの右頁に書き込まれ、左頁は後からの書き込みに使われていた。スケッチの挿絵は左頁にある。



「恐怖の波」 イヴァン・アイヴァソフスキー 国立ロシア美術館

*The Ninth Wave* Ivan Aivazovsky The State Russian Museum